上野彦馬とその時代

姫野順一

⑯ 金星観測と西南戦争

先駆けとして撮影に奔走

上野彦馬の金星観測参加はよく知られている。明治7（1874）年12月、地球と太陽の距離を測るため、各国から金星の太陽面通過観測隊が世界各地に派遣された。彦馬は、フランスのピエール・ジャンサン（金比羅山で観測）と共に長崎に来訪したアメリカのジョージ・ダビッドソン率いる派遣隊に、第3等写真助手として雇われ、大平山（観測後、星取山と呼ばれる）で観測機器を撮影した。

写真①は、観測機器の配列を撮影したものである。左は、すぐ横の可動式太陽反射鏡を撮影し、金星の子午線上の通過を測定する子午儀の格納小屋。中央は、屋根にスリットが切られ、アーバン・クラーク屈折赤道儀望遠鏡を格納する金星通過観測所、横の棒状は水平望遠鏡の屋根、右端は暗室を備えた写真撮影準備および処理小屋である。

彦馬はこの時、水平望遠カメラの頭部の太陽反射鏡（写真②）と眼視用赤道儀（写真③）、屈折赤道儀望遠鏡（写真④）を近撮している。近代的な科学に興味を持つ彦馬は、金星観測隊に参加することで、世界における天文学と科学観測の最先端に触れることができた。

◇

大型カメラで高画質の野外撮影ができる彦馬は、明治10（1877）年3月、征討参軍川村純義の指揮下にあった熊本県令北島秀朝から西南戦争の戦場の写真撮影を依頼された。彦馬はすぐに熊本に入り、戦争渦中に撮影した写真69枚3セット（5月17日）、35枚12セット（5月24日）計420枚を軍団参謀部に納品した。代金は595円61銭（当時の1円を2万円で換算し約840万円）であった。まだ戦闘は大分・宮崎・鹿児島方面に展開中であり、西郷隆盛の自刃は9月24日のことである。

彦馬はその年の3月に開催された九州初の勧業博覧会で忙しかったが、西南戦争の激化により博覧会は100日の会期半ばで中止された。そこで、弟子の野口丈二と薛信一を連れ、大八車に機材を積み込み熊本に向かった。

戦場に到着したのは3月26日。2月22日に熊本城の攻防戦が始まり、乃木希典少佐が軍旗を奪われた植木・木葉の戦い（2月22～25日）、高瀬の会戦（2月25～27日）、山鹿の攻防戦（3月3～4日）に続く田原坂の攻防戦（3月4～20日）が終わった直後であった。

写真⑤は、攻防の激戦地田原坂を政府軍本陣（木葉）側から撮影している。写真⑥は田原坂の中腹である。わが国で初めて戦場に電信線が敷設され、戦況は刻々と東京の総司令部（征討総督有栖川宮熾仁親王、参軍山縣有朋陸軍中将、同川村純義海軍中将）に報告された。写真⑦は、峠の頂上の松下彦次郎宅の小屋と土蔵である。薩摩隊の軍議に使われ集中砲火を浴びたため、弾痕が生々しい（現田原坂西南戦争記念館）。17日間で1日に政府軍だけで32万発の銃弾が使われた。

写真⑧は、吉次峠における薩摩隊の草ぶき小舎。田原坂から南に約4㌔のこの峠でも攻防戦（3月4日～4月1日）が繰り返され、薩摩隊士は仮眠したこの小舎から昼の戦闘に出撃した。横でくつろぐのは撮影助手の野口および薛と人夫と思われる。

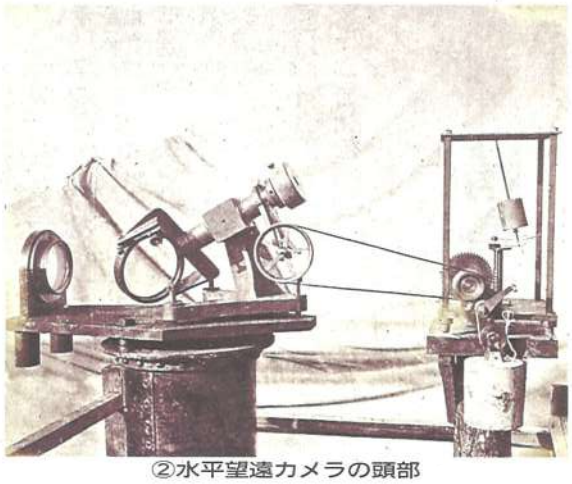
谷干城ら政府軍が守る熊本城は3月15日に開城され、戦闘がいったん終結した4月25日、撮影隊は熊本での撮影を終えて長崎に帰郷した。

納品した戦場の高精細写真は好評で、年末に警視隊の注文を受けた。東京で活躍した弟子の内田九一は明治8（1875）年2月に亡くしていたため、その弟子の長谷川吉次郎を誘い、再度戦跡を撮影した。2人は二等警視補大山綱昌の案内で、長谷川は八代口・植木口・熊本口を、彦馬は水俣口・鹿児島口を撮影した。この写真は「西南役写真帖」3冊として皇室の美術品を収蔵する三の丸尚蔵館に保蔵されている。

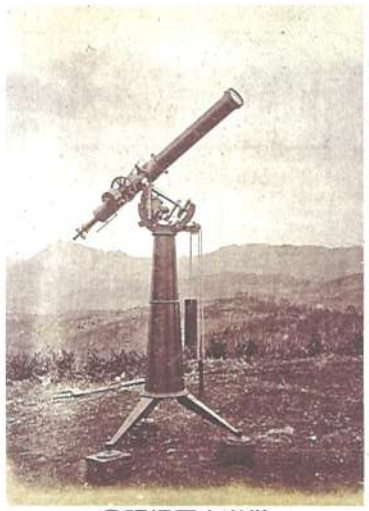
彦馬の西南戦争における戦場写真の撮影は、従軍写真の先駆けとなるものであった。

（長崎外国語大特任教授）

①アメリカ隊の金星観測装置（以下、写真は全て日本大芸術学部蔵）



②水平望遠カメラの頭部



③眼視用赤道儀

④屈折赤道儀望遠鏡

⑤田原坂前面

⑥田原坂西

⑦田原坂　松本彦次郎宅の土蔵

⑧吉次峠の薩摩隊廠舎

長崎新聞 2024（令和6）年10月20日掲載